

---

# 月夜のサハラ

八柄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月夜のサハラ

### 【Nコード】

N9020V

### 【作者名】

八柄

### 【あらすじ】

「変態滅びろ」

変態ホイホイの女子高生が転生トリップ（予定）。男児に。GL、BL含みます（確定）。

## 佐原 八重の回想

思えば生後三ヶ月、うっかり誘拐されかけた辺りから私の変態遍歴は始まったのだ。

犯人は若い女性だった。赤ん坊の私をベビーカーから奪取して逃げようとしたらしい。

とつさに彼女を追いかけて、走りながら必死に説得し、無傷で私を取り返すというファインプレイを決めた父の談だ。

幼稚園に通っていた時は、いつも公園で遊んでくれたお兄さんが私をトイレに連れ込もうとしたり、怪しいオジサンやオバサンがお菓子をちらつかせるような事が後を絶たなかった。

小学生にもなれば、下校の際には後ろに二、三人が当たり前だった。更に恐ろしい事に、同級生のストーカーまで出来た。何が恐ろしいかと言うと、その辺の不審者と違って警察が介入できないのだ。

当時、既に私は近場のお巡りさんに顔を覚えられるほどにはお世話になっていた。

国家権力は変態の皆さんをたやすく蹴散らす事を知った当時の私にとっては、お巡りさん達がヒーローだったのだ。

しかし、ヒーローも流石に小学生を職務質問で追い払う訳にもいかず、下校する私の後ろには日替わりで同級生や下級生や上級生がついて回った。

話しかけてくる事がほぼ無かったのが救いといえばそうかもしれない。

中学生になっても私の変態吸引力は一向に衰えなかった。高性能な掃除機か。

移動する範囲が増えたせいか、後をついて来るだけじゃない変態も増えた。学校では、ついに教師に手を出されそうになったり一部の

生徒から男女問わず来いアプローチをされた。性的な意味でだ。ちなみに教師は懲戒免職になった。

いざ思い返すと私がすごくモテる人のような気がするが、私に過剰な好意を持つ人々は、男女問わず殆ど例外無く変態だ。要するに非常に残念な人々である。

というか、変態の攻勢に耐え兼ねて友人未満は未満のまま消えていくのだ。

結果的に私の周りには変態ばかり、という訳だ。

下駄箱にラブレター（怪しい香りと血痕らしき何かが付着）なんてアプローチは序の口だ。彼らは常に予想の斜め上に行く。

正直性器とか見飽きるレベルである。そんなある意味爛れた人生を送ったせいかちよっと荒んでいた私に転機が訪れたのは、高校生になつてからだつた。

高原 千鶴。私にとって初めての親友である。

入学式に続き、クラスでも隣の席になつた事をきっかけに、一緒に行動するようになった。

度重なる変態的なアプローチや、それを見て遠ざかつていく友人知人の行動により人間不信気味だつ変態に怯むどころか私を庇って身構える始末である。心身ともに強い彼女は、ストーリーキングタイプにもダイレクトアタックしてくるタイプにも一歩も退かなかつた。

千鶴と親しくなつてから半年後、ダイレクトな変態達は大方なりを潜めていて、私は高校生活をエンジョイすることが出来た。きっと人生のピークだつた。

当時のアクシデントは、海でしつこくナンパしてきた二人組を千鶴が投げたくらいだつた。ワンピースタイプの水着で良かったと心底思う。

そして私の人間不信も大分薄れた高二の冬。

私は、恋をしていた。

相手はありがちだけど、バスケット部の先輩だった。

あんまり表だって騒がれる感じじゃなくて、隠れた本命がたくさんいそうな格好良さに惚れた。

普段の穏やかな雰囲気とバスケの試合で見せる気迫とのギャップが大変好ましかったのだ。

初恋だったと思う。

千鶴にもたくさん相談して、またもありがちだが先輩の卒業式に捨て身で告白したのだ。

結果、奇跡的に付き合って頂ける事になった。信じられなくて、先輩の顔を凝視したまましばらく呆然としてしまった事をよく覚えている。

春休みに入り、初デートの日も決まり浮かれていた私は千鶴と映画を見に来ていた。

千鶴に誘われて、ちよつとマニアックな雰囲気の映画を二人で観た。デートに備えて、千鶴にも見て貰いながら甘めのミニスカートなんて買った帰りだった。

私は千鶴に刺された。

信号待ちの最中、急に背を押されたような衝撃を感じてよろけた私はそのまま倒れた。

起き上がろうとしたら、背中が引き攣るように痛くて熱くて冷たくて、気持ち悪くて立てなかった。

「好きなの、八重」誰が何を言っているのか分からなかった。

「好きなの、お願い、わかって・・・ねえ、八重」

千鶴は動けない私を抱きかかえながら、どんなに私の事を愛しているかということ、先輩と私がどれ程に憎いかということ、だからこうするしかなかったということをずっと呟いていた、と思う。

私はまだ寒い時期で、それも夕暮れだというのに冷や汗が止まらない事が恐ろしくて、どうにかして家に帰るか背中の汗らしき何かを拭き取ってしまいたかった。

痛みはさほど感じず、ただひたすら自分から何かが無くなり、体が冷えていく感覚が気持ち悪くて仕方なかった。

千鶴が私の名前を延々と呟き始めた辺りから、まぶたがどうにも重くて目を閉じた。途端に楽になった、気がした。

そうして私はきつと死んだ。

・・・しかし私は、もう一度産まれてしまった。  
何の因果か、この見知らぬ世界に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9020v/>

---

月夜のサハラ

2011年10月9日14時54分発行